

● 國民美術館の設立

△國民美術協會新計畫

△黑田清輝氏談

國民美術協會では先般來一大美術館設立の計企を立て、黒田清輝氏が専ら其事に當つてゐると聞いたので同氏を訪ねて、之を質すと

國民美術協會では創立以來美術界の進歩を促すため各方面の美術家を徳憑して美術館の設立を企圖して居た。西歐諸國には何れも立派な美術館があつて現代若しくは過去に於ける名作を陳列して一般公衆の觀覽に供して居る。然るに我が國には何等斯かる設備がないので、大に之を遺憾とし、先般來國民協會が發起して普く世の有志者の賛同を得、株式的の組織で理想に近い美術館を設立したいと思て寄々協議會を催して居た。ところが如斯き計畫は既に前田正名氏がやりかけて居ると聞いたので、早速同氏に計ると、恰も我々と同様の意見であつた。従つて同じものを二ヶ所でやる必要はないから其の創立に關する資金其他の實際的の事には専ら氏に依囑し建築、意匠其他出品に關する事項は協會の方で擔任をすることにした。未だ具體的の御話しは出來ぬが今迄の經過では資金約十萬圓を募集し、名前は國民美術館、設立の場所は丸の内の三菱ヶ原で出來るならば明年の秋頃開館の運びにしたいと思つてゐる。其設計には普く歐米諸美術館の長所をとり材料も可成不燃燒物を用ひ出來得るだけ完全なものを作りたと思つてゐる。定款其他詳細の事項は目下起草中であるから何れ近日中に發表をする筈である。

『読売新聞』大正二年四月二十五日

黒田が美術館建設の夢を抱いていたことは「名家を訪ひて美術界の傾向」（本書二六六～二七二頁）、「美術と文部省」（本書三四、三四五頁）からもうかがえるが、本文献では充足なつた国民美術協会による構想として、その名称や設立場所が明記されるなど具体性を帯びている。さらに本文献には、鹿兒島出身で経済官僚であつた前田正名（一八五〇～一九二二）の名が賛同者・協力者として挙がつており、日記にも本文献掲載とほぼ同時期、四月三日・二日・二五日に前田を訪ね、美術館設立の相談をしたことが記されている（『黒田清輝日記』第三卷）。その後『美術新報』二七七（大正二年五月）時報欄に「国立美術館設立の計画」と題して、本文献とほぼ同内容の声明が掲載されるが、同年五月一六日付『読売新聞』、「国民美術協会の現状」と題する和田英作の談には「尚ほ又先般来計画中の国民美術館設立の件は昨今排日問題のため実業家諸氏が多忙であるから同問題解決を俟つて着々計を進捗せしめる都合である」とあり、アメリカでの排日運動のあおりを受けて資金調達が進まなかつた様子がうかがえる。結局大正三年秋の開館を期した「国民美術館」の設立は、実現には至らなかつた。